時

(二〇〇六年二月六日 第二十三号)

前田勲男

高

層

賃

貸マ

ン

シ 3

ンである。

に

よっ

て建

てら

ħ

た

乪

+

階建

7

0

市

基

盤

公

4

現

在

0

都

市

再

生

一機

構

心での移り住み 東京の 原 風 景

転と絡 どで騒が 京 この二十 0 中 め、 心 部を移り しくなる 年 自 分 あ É 0) り、 住 0 住 を避 み ん で か オ け フ 11 ₽ る。 な イ 再 が 開 ス 5 0) 発 東 な 移



防

衛

る

0

 λ

で

11

ま

に

近

牛

込 台 地

0 中 で

 \mathcal{F} 海拔約 四 + X 1 1 ル 0 高 台 に 旧 都

> 門 届 軍 は オ 近 ζ 放 か ち 海 41 家 愛宕山 なみに 送 抜 所ということで、 5 0 菩提寺、 約二 徒歩で二十 局 が 建設さ 十六メー 0 九二 頂 上 港 n に、 · 分も Ŧi. 区芝の増上寺で 年、 \vdash た な が、 \mathbb{H} 電 ル である。 波 新 本 ζ) 上寺に そ 初 が 橋 や 遠く 0 0 徳 ラジ 虎 頂 Ш に B 上 将

垣きずる うことで有名である。 平 九くろう 0 頂 が馬で登っ 上 ま で 0 て 本当に 階 降 段 ŋ は 急勾 た ٤ 配 曲ま 77

馬のままで折ってくる者を求めた際、1人、 七月に発足した組 市整備公団・都市基盤整備公団を中心に二〇〇四年 上下し、 「江戸初期の武士・馬術家。讃岐丸亀藩士。 本住宅公団などが母体になって発足した住宅・都 将軍徳川家光が芝の愛宕山下で山上の梅花を乗 名をあげた 織。 一六三四 石段を



怖 ŋ な を 手 などは る時 使 41 د يا す 降 لح わ ŋ

段 れ を馬 7 ŧ, に乗って上り下りしたと言 信じられない。 わ

ے

0

階

頂 さらに 上 そこ で、 付 勝っ け 加海 海 角 加 5 え れ ٤ 西さい ば 郷ご 隆か 0) 盛り 愛宕 は 会談 Ш

0

八百八町を眺望させ、 か 勝 海 舟 れを火 は 江 0 戸 海

0 して多くの 無 意味さを説き、 苦 しめることに 江 戸 城 なるこ 0 無けっ

ح

に

開城が 納 得さ というアイデアを せたという。 西 郷 隆 盛 に

貸

7

ン

シ

3

ン

の 二

階

に

住

ん

で

د يا

た。

嫌

0

写

真

0)

六

階

建

7

0

瀟り

洒りしゃ

な

民

間

賃

か

る、

上

あ

所

に

あ

苦

隔台

7

た

に

り

つ

最

住

せ

前

 \exists

ン

に

ン

シ

0

は

通

ジ

東

南

0

角

部

屋

で

H

当たり

Ę

良く、

静

嫌

だと

思

つ

た。

層 手 ら ₽ Ź 前 7 海 ン 住 抜 中 ショ 央に が 二 ん で 聳 ン二十八階にい 倍 61 え立 る。 5 か つ 今 61 四 は 高 十 最 台 階 初 0 る。 建 地 0 て 写 域 0 真 に 高 長 0

え

7

そ

W

な

見

晴

ら

L

0

良

ζ)

愛

宕

Ш

ょ

ŋ

か

で、

な

か

な

か

快

適だっ

た。

定

期

的

とも 大 に 病 通 あっ 41 院 わ な に な て、 歩 か け つ د يا n そこを移ることなど考 て三分 ば な 5 ほどで行けるこ な 東 京 女 子 医

たく考えなかっ ン シ て近 に < 移 で た。 ŋ 建 住 設 むことなどま が 始 ま つ た

高

層

1労話 だ、 さ ま 関 初 工 か ŋ れ ク つ わ 0 た。 を直 7 ましてそこに に つ 高 卜 ₽ 層 X N た 建設 高 接 工 ビ Н で採 ル、 に ンジニア K 層 ビ 技 聞 0 り上 ル 術 霞 テ < 住 で 機 レ は ケ 会 0 関 げ ビ む 仕 後 5 0 事 が 番 れ 人 ビ た あっ は す 7 ル n 組 5 る 絶 61 0 た プ た。 対 日 0 る か 建 驚 築 に は 5 本 口

> \$ ح 中 劣らず大幅 設 ず 歩 ح 感 察 つ した。 した。 ζ, L 7 11 層 0 41 うことが た か 様 た。 う ビ コ 41 子 0) ル ン る。 か ピュ を基 と高 だろう そして高層 間 建 ۲ را 設 ど そ ま に 近 分 で れ 世 変 礎 工 層 1 0 かっ 間 高 か か 法 ビ わ 夕 工 < ら三十 ٤ や 事 が を つ 層 5 ル た。 まっ 半 ビ 騒 て か ح 7 で 導 5 が ル ン う 建 た 年 つ シ 好 設 は L ることを実 体 0 あ 7 建 3 技 建 に 奇 設 設 ŧ 違 さ 41 負 心 術 技 に ŋ つ 技 る け 0) が は 低 ず 経 た 術 術 観 建 う 進

驚く 次 IJ に で 基 鉄 々 1 日 ٤ 礎 骨 に ほ } ど速 吊 高 が 工 どん 事 ŋ くなる。 パ Ĺ か が ネ ど げ 終 ル 5 た。 ん わ 0 つ 床 れ 吊 ユ 7 ŋ 数 や 外 上 基 か 組 ッ 壁 げ ら 3 0 } 付 0 ク 0 け な コ 変 n レ 5 ど 化 ン 1 ク が n \mathbf{H} は ン

帰

ŋ

に、

ž

らり

غ

きに

行

つ

た

覗ゃ

7 41 く。 あ と言う間 に 高 層 ビ ル が

目 0 前 に 出 現 L た



ま か つ 中 興 た 味 は 0 をそそら で、 ど λ な具 気 分 れ 転 た。 合 に 換 なっ で 入 散 居 歩 募 7 に 集 41 出 が る た 始 0

11

ジニ えら 造 執い 拗き b 構 見 ア れ 造 に が ず、 せ 聞 ح てく 出て 7 か 別 た イ きて 5 室 れ ン た。 に フ 説 待 公 ラな 寸 僕 明 機 が L 0 ど 高 た。 7 人 に た 層 61 つ ビ 躯 た 5 ζ, は ル 工 体 で 構 ン 答 7

n

に

で

説

明

され

た。

部

屋

を

選

んだ。

て、 問 題 き に 5 なると思っ ん とし た 説 て 明 61 が た 事 あ つ 柄 た。 に つ د يا

造 眺 風 望 景 ŋ 61 は は 0 < 素 心 上 つ 晴 に か 地 部 5 良 遮 L 41 屋 る を か し、 見 つ B た。 た。 ベ 0 ラ が ン 無 な ダ 41 駄 か 窓 0 ら か な 0) 5 41

選

元

0

た。 居 定 行 抽 う。 3 順 な ₽, 在、 選 直 高 層 つ せ 位 に す し、 なる。 て を定 てやるとい でにたくさ 入居して下 倍 部 マ 率 入 居 ン ζ J 屋 め、 るなどと聞 は シ 0 3 平 向 応 に それに従っ -均で五 募 き つ ン う ż B B は 6 4 高 悪 ζ) 階 部 7 0 ح 数 ζ 応 圧 5 屋 か 係 的 ζ) さ 六倍ぐら ₽ タ 募 は 0 て イプ な雰 うより n 抽 が 人 な 決 た。 選 に 4 あ め 别 ح 进 で指 り、 聞 る。 そ 入 に 思 気 ۲ را 7

現

ようと 申 不 倍ぐらい 枠 態 に シ Ĺ 際 愉 ح 度 \exists 思 込 快 د را が ン み、 うが 豹は 7 0 つ な 0 だと言う。 変ん た。 は 住 ح あ 抽 11 人だと分 る。 ところ 面 選 ろ 会に 倒 61 親 な 地 ろ 切 0 行 枠 か が 気 に 元 ح を 枠 僕 つ が つ な で、 た。 た 取 な あ 9 が 5 る。 5 ŋ 隣 た。 まだ 係 止 直 0 地 抽 員 7 め

どうしても西日 لح き で ぶことが \$ る 富 嫌 か B 優 最 た 流だっ どう け 終 階 先 士 倍 数 順 Щ n でき た 位二 ど、 率 か 0 ₽ は三 0 朓 自 41 た。 ろ で、 位 望 分 抽 倍ぐ で 0 41 が 0 選 あ 厳 ろ 売 新 好 に 東 当 崽 きな つ 京 ŋ ら L 宿 一たっ さ 案 た。 湾 41 物 0 とこ 側 が に L 0 高 た。 た 部 0 気 部 層 上 ろ け ビ が 東 掛 屋 屋 を そ 側 か n に ル 0 つ 選 7 ŋ す 群 向 0 n

61

景

に

見

える。

屋 0 ベ か ラ 5

そ

0

部

か 5 順 に

は、

左

手

若 41 頃 に

筑

波

山

+年 あ

葉 住 ŋ 県 ん だ千 移 0 幕 ŋ

張 X ツセ、 そして三浦半島さえも

遠 基 菩 0 か 本 け 港区 提 本 籍 広 寺 0 7 的 一内だっ 望できる範 0 赤 東 に 坂 京 は、 あ る、 や 0 高 ک 中 れ

望 び を楽 なが 暖 か しんでい 61 H こん 射 L たら、 を な 浴

ک + 车 あま **b**,

何 度 ₽ オフィスも 住

ま د يا \mathcal{F} 替 「えたけ れ だ ど

で

こここ 輪 0

に 気 付 41 た。 たこと

井

る高層 5 黒 λ 地 印) 図 で 目 に 7 7 原然 然 オフィ ン る 0 推移 シ 所と次に住もうとして …だっ \exists を書き込ん ン ス た。 0) (赤 場 印 所だった。 例 外 と 住 で眺 は、 現 ま め 在 た 7

宮御

所、

そし

て

77

ま

話

題

0)

六六

本

木

住

京

0

ヒ

ル

ズ」

などが

望できる。

場、

東

京タ

ワ

]

赤

坂、

迎

賓

館

東

F,

1

ム、

法

政

大学、

上

智

大学、

お

台

中

近

景

に

は 早

稲

田

0

森

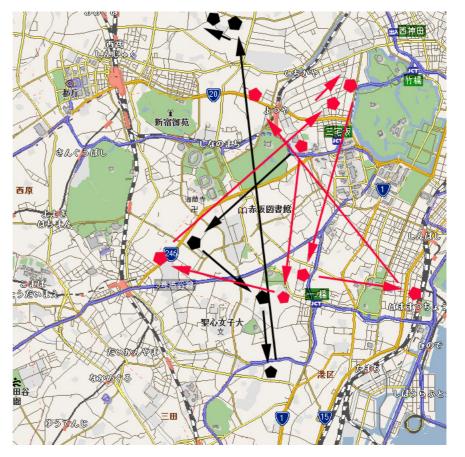
か

5

後 楽園

そ 歴 て 改 めて 僕 は 住 ま 41 に つ 41 て る。 は

史的 ここは港区 ٤ 故こ 7 事じ 来ら う 歴れ そ 地 域 0 れ では 0 積 \mathcal{F} 原 み 江 なく 型 重 戸 が 幕 ね 新 形 で 府 ル成され、 は 宿 0 なく、 成 区 立 で 以 あ 東 人 来



確 件 が 「沖積世 認 に 住 突 み き 始 動 8 か た 四 に さ 一 洪積世 至 れ る 7 自 き \sqsubseteq 然 7 科 7 か 学 ることを 的 現 な 在 条 0

東京

新富町

築地

5

世 沢 を だ 選 新 つ ち たことも N ょ 0 う で 土 は 地 談 動 「ア 社 あ 11 を 7 つ 1 7 読 スダ 61 ると 洪 み 終 積 東 1 思 わ 層 京 バ つ つ 0 1 た た 0 洪 台 あ 積 لح 中 地

科 を友 中 学 沢 人に 者 新 で 伝 氏 は えて は な 哲 4 学 が 下 図 そ 0 0 よう コ ン な セ 部 ブ

者 で あ つ て、 自 西口 7,9 神田 i宿 新橋

品川

"地質時代の第四紀の前半。更新世と同義。同"地質時代の第四紀の前半。更新世と同義。同"地質時代の第四紀の最後の時期。完新世と同義。洪積世の氷河が溶け去ったあとの時代で、氷河時代で、氷河を背景にして人類が進化した水河時代で、氷河を背景にして人類が進化した別在に至る。現在の川、湖、海、砂漠などにお現在に至る。現在の川石器時代にほぼ相当。 で化した 化しる大 に た に た に た た で同 代候お

う

海

水

面

0

上

昇

に

ょ

つ

7

海

水

積

世

0

₽

0

洪

積

層」

黄

色

0

部

分

٤,

氷

河

0

後

0

地

図

を作

5

せ

た。

東

京

0

地

積

層

をえぐって侵入し、

その 表 退 が が 右 上 に 洪 伴 図 洪 地 中 青 新 つ たに 7 図 沢 色 色 氏 0 分け 部 形 は 成さ 分 呼 人 L ん 0 とをコ で た 歴 n B た 7 史 る。 0 0 沖 観 で ン 積 ピ 点 あ 層」 る。 か ユ 5 1 右 そ 夕 义 縄 を n 文 を 使 で

感じ 海だ ŋ 学 ŋ ح B た 人 流 る 1 積 É 層 的 ŋ 低 中 社 0 同 ۲ را が n ル 沢 会科 7 時 な事 \langle てい つ 地 歴 う L 埋 か たり、 に、 生 < であ は、 新 か た 5 史 め 数十、 学 がが 実で なっ た たところが 活する 立 ح る。 7 め、 そ 氏 的 積 原 、ある。 7 た 0 X は な 3 風 池 0 人に り、 景 事 重 ζ.) そ P 江 1 上 原 る。 ے 実 0 沼 に ね 戸 1 にだっ であ よっ が 多 時 砂 5 風 東 高 ル 景」 د يا ے 京 層 代 B B れてきたこと 41 て千 る。 つ ま た 泥 れ 0 ビ に 堆 を身 で り、 は、 積 0 は ル L が 年 基 事 自 は を か L 数 近 層」 あ 作 L 実 然 分 Ш ま て X ŧ 科 だ か に が 1 つ

とに

判

で

押

L

たよう

É

縄

文地

図

に

光を あ て、 同 氏 が 作製さ せ た 縄 文 に

> 地 図 を持っ て、 東京を歩き回 つ

> > た

洪

積

層

は

堅

ζ,

地

盤

0

台

地

で、

沖

ح ζ. う。

見 を る うに きあ しめ 東 せ が た 京 り、 してい 複 が そ は 雑 0 つ け な多 異 多 7 つ る地 など 様 様 様 て な 体 点 は 均 ほ が 体 は、 ど 奇 質 0 61 な空間 の 構 妙 な 不 密 な 造をし ۰ ر ۲ 思 度 ね 議 じ そ として、 0 て なこ 高 れ n さ を 7 は

お 11 て ₽ で は なく、 洪 積 層 と 沖 積 層

が

せ

8

あ

د يا

を見

せ

る、

特

異

な

場

所

京 \mathcal{O} で ٤ あ 歌 ることが 7 う が 聞 都 市 こえてくる。 が わ 最と か る。 か せ そこか てい ぼ < 、る『大 は 5 そ 地 東 0

歌 を、 文章に 変換する だけ で

41

11 \sqsubseteq ح 書 61 て 11 る。

は、 中 沢 新 氏 0 言 う 大 地 0

僕

歌 中 で を 本 東 能 京 的 に 生 に 感じ ま れ 育 て 5 41 生 た に 活 違 L て 41 き な

た

思 住 11 み つ لح た。 思 0 つ た。 大学 根 底 で そ に は あ n 航 つ が 空 た 工 都 に 学 違 心 61 で 宇 な 0 宙 41 移 工 ح ŋ

学 ブ でもゼミでも を専攻したが、 地 学 興 味 地 が 質学をや あっ てクラ Ď,

した。 層 0 フィ たぶん、 1 ル そん ド 調 な下 査 などに 地 が 影響 B 没 頭

地

て 41 る からだと思う。

(つづく)